筑波大学リハビリテーション研究,7(1),82-87,1998.

〔ライブラリー〕

障害者の心理と援助

藤田和弘・福屋靖子（編著）
メヂカルフレンド社　1997年

本書の編著者は、現在筑波大学夜間大学院において、研究・教育活動に専心する藤田和弘、福屋靖子の両氏である。夜間大学院にリハビリテーションコースが開設されたのは今を遡ること9年、平成元年のことである。この間に藤田、福屋の薫陶を受け、学窓を巣立った修了生も本書の執筆陣に名を連ねる。本書は、したがって、主としてリハビリテーションコースの教官と学生の協同作業により出版された、と見ることもできる。

人が他者の心（心理）を、皮相的なものでなく根底から理解することは、たとえ肉親同士であっても、断じて容易なことではない。いわんや、障害のある他者のそれを真に理解することにおいておや、と述べなければなるまい。ところで、介護や福祉といった人間の根源的営為としての障害者への「援助」は、障害者を正しく理解することから始まるものであろう。いや、障害者「理解」はむしろ、障害者「援助」の一端を既に担っている、と換言できるかもしれない。本書は、介護、福祉の仕事に携わることを志す人々に対して、極めて難しい、しかしそれだからといって抛擲することが許されない、この重要な命題に取り組む際の基本的な在り方、そしてまた、障害者の「理解」や「援助」の具体的な方法を明らかにしてくれる。

各章には学習の「目標」と「手引き」が必ず示され、これが、本書の基本的性格が介護福祉の「教科書」であることを表している。しかし、本書は、障害者援助に関する主要な理論を紹介し、さらに、障害者援助の要諦をただ単に概説することに止まるものではない。「リハビリテーションにおける心理的援助の実際」(第6章）の記述に66頁が充てられ、その頁数が本書の全体の分量のほぼ1/3を占めることからも推察される通り、本書は概論書であるとともに、介護福祉の「実用書」であることを意図して刊行された、と見なすことも可能である。障害者への「援助」が具体的にかつ詳細に述べられ、したがって、本書が介護福祉の実践に資するものであることは間違いない。この点で、長らく介護福祉に従事し、エキスパートと自他共に認められる職業人をも、本書は満足させるものであろう。

本書は「最新介護福祉全書」の内の1冊であるが、そのラインアップを見て、「全書」の他の巻、例えば「障害者福祉論」、「リハビリテーション論」、「介護技術論」などの内容が本書の内容と重複しているのではないか、と読者が懸念を抱かないとも限らない。評者は、それは杞憂である、と考える。なぜなら、本書の書名に見られる「障害者」には、成人はもとより、乳幼児、児童、青年等が含まれ、援助される対象者については、広域の年齢層が網羅されている（ライフ・スパンで、障害者援助が追究されている）からである。本書の記述に当たり、発達の視点が明確になされ、そのことが、「全書」において、本書を特徴づけ、独自性を保たせている。本書は障害者援助に関して子どもから大人までカバーしているので、障害のある成人の在宅介護はもちろん、家庭で障害児の療育や養育に当たるご家族の方々にも、お薦めしたい専門書である。

「環境とのかかわりのなかでの心理的援助」(第6章）は、同じ社会の一員でありながら、障害者が社会的障壁に阻まれ、困難な生活を強いられることに着目して執筆された、と思われる。障害者が求める「心理的援助」の必要十分条件が社会的支援（主にhandicapの克服を図る社会的働きかけ）であることを、本章は教える。本章は、今日の世界的趨勢に基づき、「援助」が社会と関連づけて記述されていることを示唆する。

「学習障害」が「言語発達遅滞」に位置づけられることについて議論の余地があると考えるのは、評者だけのことであろうか。「学習障害」は症候群であり、カテゴライズすることが平易なことではないことを承知の上で、例えば、学習障害の下位類型の一つに「算数障害」が知られていることを指摘しておきたい。学習障害の分類の仕方を討議するのが本稿の主旨ではないので、それは別の機会に譲り、此処では、「学習障害」のような新しいタイプの障害までも取り上げることに象徴されるように、本書がup to dateなものに仕上げられていることを素直に評価したい。

（筑波大学心身障害学系　篠原吉徳）